

ジッダ日本人学校における少人数のよさを活かした学習指導と実践

前ジッダ日本人学校教諭

愛知県豊橋市立羽田中学校教諭 山田 俊

キーワード：少人数指導、数学教育、プログラミング教育、現地理解、国際交流

赴任校の概要（2021年8月18日現在）

学校名・日本語：ジッダ日本人学校

学校名・現地表記：Jeddah Japanese International School

URL：<https://jjs-japan.com/>

児童生徒数：小学部3人 中学部1人

1. はじめに

ジッダ日本人学校は全校児童生徒数が10名前後の極小規模校である。複式学級を基本としており、1学級あたり数名の児童生徒数である。

そこで、次の2視点に基づく実践研究を行うことにした。

- ① 教育効果が高く、効率のよい授業展開
- ② 児童生徒のレディネスや思い、興味関心を大切にされた授業展開

その理由は、日本で40人近くの児童生徒を相手に授業をしてきた経験や手法を数名の児童に対して同じように指導しても、非効率であると感じるときがあり、もっと個に寄り添った授業ができないかと考えたからである。

2. 教育効果が高く、効率のよい授業展開をめざした実践（その①）

【プログラミング学習の実践を通して】

小学5年生の算数「図形の角を調べよう」の単元で研究授業を行った。授業の概要は、プログラミング支援ソフト「Scratch」（マサチューセッツ工科大学：メディアラボ開発ソフト）を用いて多角形の作図をすることを通して、図形の性質を感得したり、プログラミング思考の育成をしたりすることである。

（1）授業の流れの工夫

算数は系統性を大切にしており、学んできたことを活かして新しい学びを獲得する教科だと考えている。そのため、始めからPCに触れていくのではなく、手書きで作図することを復習し、図形の性質を確認した上で、本題へ入っていくこととした。手書きでの作図をすることによって、作図の仕方を復習することができた。内角の大きさに戸惑う児童もいたため、復習したことはとても有効であった。その成果もあり、その後の「Scratch」では、内角の大きさに戸惑うことなく、自然と作図に取り組むことができていた。

（2）支援の工夫

「Scratch」は画面上の「ねこ」がプログラムに従って動き、作図をしたり、音を鳴らしたり、様々な指示を実行することができる。そのため、正しくプログラムしなければ、意図と異なる結果が画面上に表れてしまう。正多角形を作図する場合に、どのように「ねこ」を動かして作図できるか、イメージ

しやすいうようにワークシート上で考えることができるよう、個別に「ねこ」の絵を準備し、具体物を動かすことで課題に迫っていった。正三角形の1つの内角は 60° だが、プログラムをする場合は「ねこ」を 120° 回転させなければならない。ワークシート上で、自分で操作しながらイメージをつかんだ児童もいた。その児童は、その後の多角形で、回転する角度は「 180° - 内角の大きさ」ということに気づき、様々な多角形を作図することができていた。この「ねこ」の絵の支援はとても有効であったと考える。

(3) 学びの場の設定

本授業の中では、問題提起、1人学び、支援、学び合い等の学習場面がある。児童2人が学習に取り組みやすい場の設定を次のように考えた。

①準備

1人1台PCを確保することで、安心、集中して学ぶことができるようにした。2人の児童の間に教師用PCを準備し、トラブルや支援に備えた。

②問題提起、全体指導

児童の背面にホワイトボードを置き、それを用いて問題提起や全体指導を行った。

③1人学び

座席の後ろにも児童用の机を用意し、振り返ればワークシートに取り組めるようにした。

④支援

児童の間に教師が入ることによって、両児童へ支援を行った。

回転角がわかるように、内角の計算用の補助シートを準備した。

⑤学び合い

お互いのプログラムを確認したり、話し合ったりできる時間を確保した。

(4) 授業実践を通して

PCに向かう場面、ワークシートに取り組む場面、ホワイトボードを見る場面、話し合う場面と児童が活動する場面がたくさんあったが、椅子を少し動かすだけで全ての活動がスムーズにいった。また、1人学びと学び合いの時間を確保したことで、わからなかったことを聞いたり、自分の言葉で説明したりして、2人で学び合う姿があった。1つの内角の大きさを表す表を準備したことで、プログラムする時間を確保することができた。授業のねらいや児童の実態、学習環境に応じて、支援の形を考えていき、児童のよりよい学びになればよいと考える。

3. 児童生徒のレディネスや思い、興味関心を大切にしたい授業展開をめざした実践（その②）

ジッダ日本人学校では、総合的な学習の時間に、現地理解教育の一環として「サウジタイム」という時間を設けている。学習テーマは学級ごとに考え、サウジアラビアについて学ぶ機会の1つとなっている。

【サウジアラビアの「住」について（低学年サウジタイム）】

クラス（小学部1、2年）の児童は、3人であった。3人とも、ジッダ滞在が1年未満で、まだサウジアラビアの文化についても知らないことばかりであった。サウジタイムのテーマを考えると、子どもたちがいちばん興味をもっていたのは、住んでいるコンパウンド（外国人居住区）で働く人たちについてだった。クラスの児童全員が同じコンパウンドに住んでいたため、共通の話題も多く、子どもたちのよい学びになると考え、「コンパウンドで働く人たち」というテーマを設定した。

(1) コンパウンドへインタビューに行こう

ジッダ日本人学校では、週4時間英会話の学習をしている。普段の英会話学習の実践も兼ねてインタビューを行うことは有効だと考えた。事前にどんなことをインタビューするか決め、英語で質問できるように練習した。実際のインタビューでは、自分たちで働いている人たちに声をかけてインタビューすることができた。インタビューを通して、出身、仕事内容、働く時間、やりがいなどを知ることができた。インタビューをしてみると、働く人にサウジ人は1人もいないことがわかった。児童にとってとても驚きだった。しかし、難しいこともあった。質問は練習してできたが、聞き取ることが難しかったことである。インタビューを録画し、何度も学校で見直し、児童と一緒にまとめていった。

(2) 学習発表会での発表内容や方法を考えよう

ジッダ日本人学校では、サウジタイムで学んだことを学習発表会で披露することになっている。私のクラスの児童にとっては全員初めてのことで、想像ができない様子だった。過去の写真や動画などを見せてもよかったが、同じものをやりたがったり、比べたりすると思い、とにかく児童と一緒にオリジナルなものを創ろうと考えた。児童と話し合いながら台本を作り練習した。どの児童も楽しく生き生きと練習をし、発表会が楽しみという声クラスの中で出てきた。本番では、緊張することよりも、堂々と自分たちが学んできたことを発表することができた。サウジ滞在時間も短く、まだ文化もよくわからない1年生たちが、身近なことから興味を広げていった学習となった。国名を知ったあと、地図を見て国探しをしたり、働く人たちとの関わりを通して気軽にあいさつができるようになったり、児童にとって実りのある学びになったと思う。

【サウジアラビアの「食」について（高学年サウジタイム）】

小学部5、6年の担任となり、サウジタイムでのテーマを児童と考えた。前年の低学年のときとは逆に、全員（3人）サウジ在籍数が1年以上あり、サウジタイムも経験している児童ばかりだった。サウジ人の生活、イスラム教など、それぞれの興味関心が異なっており、なかなか方向性を見出せなかったが、「食」が3人の共通のキーワードとなり、サウジの食文化について調べることとなった。

(1) アンケートを整理して、サウジ人の「食」の傾向をつかもう

学校で働くサウジ人（講師の先生、事務職員、セキュリティ）にサウジの食生活について聞いてみた。が、食べる時間や回数など人それぞれでサウジ人の傾向を掴むことができなかった。そこで、講師の先生に協力してもらい、100人のサウジ人にアンケートを書いてもらった。手書きで集計しつつも、PCの表計算ソフトを用いてデータをまとめた。サウジの人たちは日本と比べて夜に活動的になる傾向がある。お店も遅くまでやっている。朝食は6時までに食べる人が多く、昼食は15時以降、夕食は22時以降に食べる人が最も多かった。その理由として、お祈りの時間（1日5回）があるため、朝食は1回目のお祈りの後に、夕食は最後のお祈りの後に食べる人が多いことが分かった。サウジアラビアでは、お祈りの時間には大音量のアザーン（礼拝への呼びかけ）が町中に流れ、お店やレジはその時間（約30分）閉まってしまうほど、1日の中で大切にされている時間である。お祈りの時間が生活に大きく影響していることが改めて分かった。

(2) おすすめのアラビック料理を食べに行こう

(1) のアンケートの中には、「おすすめの料理は何ですか」という項目がある。そのアンケートから挙げた様々な料理について調べたり、ランキング形式でまとめたりした。そのランキングの中で食べたいものを話し合いで決め、「Mandi」という料理を実際に食べに行った。「Mandi」は米を入れたお鍋の上に肉（鶏や羊が一般的）をのせた網をセットし、そのまま丸ごと地中に埋めて蒸し焼きのように調理する料理である。加熱中に肉汁が下のご飯の鍋に滴り落ちる仕組みで、ご飯にうまみが増すように

なっている。現地採用の学校職員の方にお店に連れて行ってもらい、手で食べる方法や肉を分け与えることが相手を尊重する作法だということも教えてもらった。手で食べることに戸惑う子もいたが、完食するほど美味しい料理だった。帰り際に、「また行きたい」「美味しかった」と満足そうな児童の様子があった。「食べに行く」のキーワードは子どもたちの心を大きく動かしたと思う。普段手で食べることはしない。しかし、実際にやってみると、指先が熱かったり、なかなか食べにくかったりと経験してわかることがたくさんあった。一緒に連れていってくれた現地職員から、食べ方や作法を学んだことも学習を深めることにつながったと思う。少人数だから、すぐに動くことができたよさもある。

(3) 「ハラズザバーディ」を現地の子どもと一緒に作って食べよう

その後、児童の関心が「食べたい」から「作りたい」へと変化してきたので、その現地職員の子どもたちから「ハラズザバーディ」という家庭で作れるデザートを教えてもらうことになった。その子たちは同年代で、現地の小学校に通っている。互いに英語で話しながら、料理をすすめていった。「ハラズザバーディ」は、ビスケットを細かく砕いたものを器の底に敷き、上からヨーグルトと生クリームを混ぜ合わせたクリームを乗せ、最後にカラメルソースをかける。よく冷やして固めたら完成である。冷蔵庫で冷やして1日後、一緒に作った子たちを招いて完成した「ハラズザバーディ」を食した。とても甘くておいしく、子どもたちにとってお気に入りのデザートとなった。ある児童が、学習発表会で参観される方にふるまいたいと言ったことから、発表の最後に食べていただく時間を設けた。「おいしかった」という発表後の感想を聞き、児童はとても満足していた。「ハラズザバーディ」という今まで聞いたことのないデザートを紹介されたとき、どんなデザートができるのか正直みんな不安だったが、一口食べたときにその不安が一気に吹き飛んだ様子がとても印象的だった。一緒に作ったり食べたりする活動を通して、同年代のサウジの子と関わりがもてたこともよい学びとなった。

4. 終わりに

教員にとってもサウジアラビアについて詳しく学ぶ機会となった。この学習が終わって、私自身もコンパウンドで働く人たちと関わりやすくなり、子どもたちが家で「ハラズザバーディ」を作ったり、家族と「Mandi」を食べに行ったりした話を聞くと、サウジタイムの学びがきっかけとなり、日々の生活がさらに充実したものになっていると感じた。

この実践を通して改めて考えさせられたことは、主役は児童生徒であり、子どもや環境が変われば、指導方法はその度に変えていく必要があるということである。実践授業やサウジタイムの学習は、児童とより向き合い共に学ぶよい機会となった。少人数だからこそ、もっとよりよい教育ができることを常に念頭に置き、今後の教育活動に活かしていきたい。